

# 書評

Alison Kafer

*Feminist, Queer, Crip*

Indiana University Press, 2013, 283 頁

辰己 一輝\*

Ikki TATSUMI

## 1. はじめに

本稿において紹介する『フェミニスト・クィア・クリップ』は、20 世紀後半のイギリスを端緒とする障害学 (Disability Studies) の成果を批判的に継承する形で現れてきた、クリップ・セオリー (Crip Theory) と呼ばれる新たな潮流の延長線上で書かれた著作である。クリップ・セオリーとは、クィア理論と障害学の研究者であるロバート・マクルーア (Robert McRuer, 1966-) の研究などを嚆矢として、2000 年代以降新たに台頭してきた、障害研究の新たな理論的立場を指すものである。マクルーアは著書 *Crip Theory: Cultural Signs of Queerness and Disability* (2006) において、障害学とクィア理論とを交差させることによって、両者に共通する「正常性 normalcy」をめぐる問題系を浮き彫りにしようとする。マクルーアによれば、障害とクィアは共に「健全性 able-bodiedness/able-mindedness」と「ヘテロセクシュアリティ heterosexuality」という正常性からの逸脱として規定されるのであり、それら二つの正常性は相互に絡み合いながら、自然な＝本性的な natural ものとして社会で自明視されている。また、そこで逸脱的存在とみなされ排除される障害とクィアは、単に正常性に対する否定的な価値を持つだけでなく、正常性をより強化する形で機能しうるとされる。すなわち、たとえ障害やクィアが正常性を脅かし、正常／異常の境界を攪乱しうるとしても、正常性は、そこで暴力的に排除されたクィア・障害をその脅威ごと包摂し、乗り越え生きのびるものとして、より強固な形で再生産されてしまうのである。このような、正常性からの障害・クィアの排除とその包摂

---

\*大阪大学大学院 人間科学研究科 共生の人間学 博士前期課程 ; cuzya508@occn.zaq.ne.jp

あるいは「ノーマライゼーション normalization」を通じて生きのびる、健常で異性愛的な身体という問題を、その後もマクルーアは、世界を席卷するグローバリゼーションと新自由主義が要請する、現実の多様な変化の中でも生きのび続ける〈柔軟性 flexibility〉を持った身体というイデオロギーと結び付けながら、独自の理論展開を続けている。

本書の著者であるアリソン・ケーファー (Alison Kafer) も、上述したクリップ・セオリーの影響下で問題提起を行う論者の一人である。著者は現在フィリピンにあるサウスウエスタン大学 (Southwestern University) で教授を務めており、障害学やフェミニズム、クィア理論の研究に加えて、昨今の環境学や「リプロダクティブ・ジャスティス reproductive justice」を巡る議論を主な専門としている。

本書は、そのような彼女自身の専門研究を出発点として、〈障害 disability〉を新たな仕方で思考することを目指して書かれている。従来、障害はその当事者個人 (あるいはその当事者の家族) の問題であり、取り除かれ正常化されるべき医学的介入の対象としてのみ思考されるという暗黙の前提があった。このような発想は、障害学においては障害の「個人モデル individual model」ないし「医学モデル medical model」と呼ばれ、批判すべき対象とされてきた。本書も、このような伝統的な障害学の批判意識を踏襲している。しかしながら、伝統的な障害学が、上記のモデルに代わって障害の「社会モデル social model」、すなわち、障害を社会によって作られたものとみなし、個人に対する医学的介入ではなく個人を取り巻く社会環境の変化こそを重視すべきとするモデルを提示したのに対して、著者は新たに障害の「政治モデル／関係性モデル political model/relational model」という概念を提唱している。確かに、伝統的な障害学の仕事が社会モデルを提唱しながら、物理的・身体的な損傷や欠陥としての「インペアメント impairment」と、インペアメントを持つ人々を不当にも排除する社会がもたらす不利益や制約としての「ディスアビリティ disability」を区別したうえで、後者の問題に光を当てた点は重要である。しかし、著者はその成果を受け継ぎながらも、社会モデルがしばしば前者の次元を軽視し、そこにあるはずの政治性を「脱政治化 depoliticization」してきた点を批判する (この「脱政治化」という論点については本稿の第3節で再び取り上げる)。著者にしてみれば、インペアメントもディスアビリティも等しく政治的なカテゴリーに属する

問題であり、前者を脱政治化することはむしろ、障害を別の仕方でも思考することを妨げてしまうのである。

以上の前提から、本書は障害研究を中心に据えつつも、同時にその問題意識をフェミニズム理論やクィア理論へと接合することを試みる。著者によれば、フェミニズムもクィア理論も障害学も、現在支配的な思考（性差別、異性愛主義、健常者中心主義＝エイブリズム *ableism*）とは異なる思考を提示しようとする政治的視点において一致している。このことから、クィア理論のテキストの障害学の観点からの読解や、障害者運動とフェミニズム運動の合流などといった共同実践が不可欠であると、著者は考える。紙幅の都合上、それらの議論全てを詳細に追うことは叶わないが、本稿では主に「未来を想像すること」と「脱政治化」という二つの論点に即して、本書のエッセンスとなる部分のみを取り上げてみたいと思う。

## 2. 障害者にとっての未来を想像すること

本書は前半の第1章「Time for Disability Studies and a Future for Crips」から、第4章「A Future for Whom? Passing on Billboard Liberation」までの四つの章を割いて「時間」ないし「未来」に関する考察を行っている。このことはとりもなおさず、障害というものを考える上で〈時間〉という概念が非常に重要な位置を占めていることを意味する。従来、障害は基本的に半永久的な悲劇とみなされ、よりよい未来は常に障害の存在しない未来として想像されてきた。本書は、このような未来観の背後に横たわるエイブリズムを批判し、障害を安易に排除することのない未来を想像することがいかにして可能か、様々なテキストや実践に依拠しつつ論じていく。その際に批判対象となるのが、エイブリズムを基礎とした「治療的時間 *curative time*」と呼ばれる概念である。第1章の冒頭で著者は、医学の専門用語の内に、広い意味での〈時間〉に関連する用語が頻出する点を指摘しながら、医学の領域を支配するエイブリズム的思考を分析する。例えば「慢性的な」疾患や病気の「再発」、「先天的」または「後天的」な障害といったように、医学関連の語彙はしばしば時間性を含んでいるとされる。しかしながら、それらの語彙が含む時間性は（たいていの場合「進歩」や「発展」といっ

た概念と結びつきながら) よりよい未来を障害の「欠如」とするエイブリズム的な思考に囚われてきた。その結果、よりよい未来という理念から障害は排除されると同時に、その未来からの排除を逃れるための唯一の方法は障害を「治療」することであるとする「治療的時間」が支配的な考え方となっていくのである。著者は、このようなエイブリズムを前提とした時間観念がいかにして形成されるのか、そして、それに代わるオルタナティブな時間観念をいかにして提示することが可能かを積極的に問うていくことになる。

上述のような問題意識に基づいて、本章の前半部では、米国で議論を巻き起こした「アシュリー・トリートメント Ashley Treatment」と呼ばれる事例の分析(第2章)や<sup>(1)</sup>、ある聴覚障害者同士のレズビアン・カップルが、子どもを授かる際に聴覚障害者のドナーの精子を用いるという決定で社会的に注目された事例の分析(第3章)、あるいは、屋外の広告掲示板をはじめとする様々なメディアを介して「より良き生」のための情報を喧伝する「FBL (Foundation for Better Life)」という団体に関する分析(第4章)などを通じて、上述したエイブリズムを前提とする「時間」や「未来」に対して異議を唱えていく。ところで、著者は上記のような具体例も含めて、障害について語る言説が、専ら障害を個人の意志決定や責任の問題へと矮小化し、そこにあるはずの政治性を抹消してきた点を批判している。そして、政治性の抹消は、我々が<障害>という概念それ自体を疑問に付す機会を奪うために、上述したエイブリズムをより強固なものにしてしまうのである。そこで本書の後半部では、障害の「脱政治化」という観点から、様々なトピックが批判的に再検討されることになる。

### 3. 障害を政治的議論へと開くこと

本書の後半部である第5章「The Cyborg and the Crip: Critical Encounters」から、第7章「Accessible Futures, Future Coalitions」までの3つの章は、この「脱政治化」という視点から、既存のフェミニズム理論や環境学などの知見を取り上げることによって、障害を理解する際の新たな想像力を得ることを目指している。以下、章ごとに順を追ってみていこう。

第5章では、米国の研究者であるダナ・ハラウェイ (Donna Jeanne Haraway, 1944-) のサイボーグ論に対して、立ち入った考察が行われている。ハラウェイは雑誌『社会主義評論』に発表され、後に『猿と女とサイボーグ』(Haraway, 1991) に収録される「サイボーグ宣言」(“A Cyborg Manifesto,” 1985 初版)において、人間／動物、機械／生命などといった二分法を攪乱する、ハイブリッドな存在の形象として「サイボーグ」という語を用いている。彼女は、このサイボーグという形象を用いることで、純粹無垢な「自然 nature」というイデオロギー、あるいはそのようなイデオロギーにおいて自明とされる男性／女性というカテゴリーを解体しようとする。本書は、このようなハラウェイのサイボーグ論を高く評価した上で、サイボーグ概念を障害学へと応用すること、つまり、障害者の身体へのテクノロジーの介入といった「交配 hybridization」の経験を、ハラウェイのサイボーグ論の延長として分析することを試みている。しかし、ここで留意しなければならないのが、サイボーグという概念を単純に機械的・医学的なメタファーとしてのみ利用してしまうと、直ちに障害者の身体を巡る問題が脱政治化されかねない、という点である。著者は、ハラウェイの後続の研究者たちが、サイボーグをまさしく障害者の生きる身体を例証するものとして捉える一方で、しばしばそれを単純に医学的なアナロジーで論じているがゆえに、テクノロジーを「健全な身体」へと障害者の身体を治療・正常化するための「補綴 prosthetic」としてのみ理解している点を批判する。本章は、以上のような批判を経由することで、サイボーグという概念がもたらす攪乱の経験と、それが有する政治的意義を重点的に論じていく。

次の第6章では、昨今の環境運動の高まりと並行して新たに台頭してきた環境学などの知見を取り上げている。そこでも問題となるのは、環境学が依拠する「環境」(あるいは「自然」や「荒野 wilderness」など)という概念そのものが脱政治化されている点を批判し、そこから環境と障害とを新たな仕方で結び付け思考する方途を探ることである。本稿の「はじめに」でも述べたように、著者は障害学における「社会モデル」という概念に疑問を呈していたわけだが、本章においても、冒頭から社会モデルに対する問いが投げかけられている。例えば、社会モデルは、車いすを利用する身体障害者の特定の場所へのアクセスが階段によって阻まれるとき、それは

スロープやエレベーターを設置しない社会の側にこそ責任があるという理路で、障害と（社会）環境との間の関係を問うていくのが通例である。しかし、社会モデルにおいては、より広い意味での「環境」における問題、つまり、斜面の険しい山や、砂の摩擦で車いすでは通過できないような砂浜といった場所におけるアクセスの問題を考えることは困難であるように思われる。そこで本章では、社会モデルの射程を超えて「環境」を論じるために、環境や「自然」に関わる複数のテキストの読解が試みられている。その中で著者は、社会モデルが言及する狭い意味での（社会的につくられた）「環境」よりも広い意味での「（自然）環境」もまた、歴史的・文化的な背景を持ち、そこに伏在するエイブリズムが、障害を「自然」から排除してきた点を示していく。

最後に、本書の終章に当たる第7章では、障害に関する異なった未来を想像することが、障害学や障害運動の枠内に留まらず、フェミニズム運動やクィア団体をも含めた政治的「連合 coalition」の可能性を与えうる点が示される。従来のフェミニズム運動やクィア理論の試みは、常に「女性」や「異性愛」といった概念に異議を唱えることで、（必ずしも専門家のみにも留まらない）多様な人々を議論へと巻き込む形で政治的連合を構成してきた。したがって、障害学や障害者運動もまた、積極的に「障害」という概念の自明性に疑問を投げかけ、その概念を常に議論へと開かれたものにすることで、障害学の研究者や運動家だけに閉じない、様々な人間から成る政治的連合を可能とするだろう。また、「障害」という概念を常に議論へと開かれたものにすることは、現実のいたるところに障害の問題を見いだしていくという視座を我々に与えてくれる。そのような視座は、例えば特定の空間における女性の排除を、障害者の空間への「アクセス」の問題としても分析するなどといったように、複数の問題領域を横断する形での議論を生みだしていくだろう。著者はそのような開かれた連合を示唆する例として、米国における、トイレなどの公共空間における障害者やトランスジェンダーの排除と、それに対する抗議の例などを挙げながら、そこでいかにして障害研究とクィア理論、フェミニズム理論が交差し、協働する形で政治的主張を練り上げていくのかを詳細に論じている。そして、このような政治的連合を目指すことで、我々は今ここにある現実とは異なる、障害者も含めたより多くの人々がアクセス可能な未来を想像することができると、著

者は述べるのである。

#### 4. おわりに

以上ここまで、本書の大まかな内容についてみてきた。無論、著者自身が最後に述べているように、本書では扱いきれなかった課題も数多く残されている。また、著者が立脚するクリップ・セオリーという理論自体が比較的最近現れてきたものであり、今後さらに踏み込んだ考察が必要なのは言うまでもない。とはいえ、本書の「治療的時間」に関する考察や、「自然」あるいは「環境」という概念を取り巻く政治性の分析は、従来の障害学からみても目新しいアプローチであり、多くの示唆に富んでいる。そして、上述した問題の数々は、著者によって安易に結論が出されているわけではなく、様々な読者がその問題へと巻き込まれることができるように開かれている。その意味で本書は、エイブリズムを前提としない未来、未来における障害との〈共生〉を思考するための格好の手引きとなるだろう。

#### 注

- (1) アシュリー・トリートメントとは、重度の重複障害を持つ女兒（アシュリーX）に対して施された、ホルモン療法による成長抑制や子宮・乳腺芽の摘出といった一連の治療を指す語である。本治療の動機としては、本人の精神とは離れて身体が成長してしまうことで生じる、精神／身体間のギャップによる苦痛の緩和などといった点が挙げられるが、著者はこれらの治療を、彼女の「未来」を医学的介入によって奪うものとして批判的に論じている。

#### 参考文献

- McRuer, Robert 2006. *Crip Theory: Cultural Signs of Queerness and Disability*. New York: New York University Press.
- McRuer, Robert. 2018. *Crip Times: Disability, Globalization and Resistance*. New York: New York University Press.
- Haraway, Donna. 1991. *Simians, Cyborgs and Women: The Reinvention of Nature*. New York: Routledge.